令和４年１１月３０日
第５５６号
横浜市立日吉台小学校
吉井　宣明

言の葉にのせて

副校長　澤　勉

サッカーワールドカップも佳境に入り、教室内でも毎日のように、小さな評論家たちが試合結果について、熱く語る姿が見られます。２０年前の日韓大会における決勝戦では、守護神のオリバー・カーン（準決勝までわずか１失点）が率いるドイツと、絶対的エースであるロナウドなどのタレント揃いのブラジルが対戦し、横浜国際総合競技場（日産スタジアム）周辺でも両国サポーターの熱い応援が見られました。

さて、今回のワールドカップでも、「気持ちをのせた熱い声援」という表現が多く使われていますが、日本では万葉の昔から「言葉に気持ちをのせる」ということを意識していたようです。

しきしまの　倭（やまと）の国は　ことだまの　たすくる国ぞ　まさきくありこそ
（柿本人麻呂　万葉集　巻１３）

これは、海路の旅に出る人に向けて送った歌とされています。「日本は言葉を大切にし、言葉に助けられる国です。だから私は心を込めて“ご無事でいてください”と申し上げます。」という内容のものです。まさに、発した言葉が事物現象、森羅万象を動かすという「言霊信仰」につながるものになりますが、そこまで大げさでなくても、実際に発した言葉が現実の事象に何か影響を与えるということについては、誰もが経験しているのではないのでしょうか。

ところで、「言葉」は漢字二文字で表されます。「言」にはどうやら「誓い」という意味があるようですが、「葉」は文字通りの葉っぱであり、これはお皿とか器という意味のようです。実際に葉を器にするものは現在でも様々残っており、朴葉焼などもまさにお皿や調理器具としての用途で葉が使われています。

私が担任をもっていた時、国語や道徳の時間に、「言葉は気持ちをのせるお皿です。ただ、お皿に載せた「気持ち」は見えないものだから、使ったお皿（言葉）の種類で相手に誤解されてしまうこともあります。また、使うお皿（言葉）が汚れていると、せっかくのせた自分の気持ちも汚れてしまいます。」という話をしました。人は他人の気持ちを推し量るとき、音声言語と表情という情報を活用して判断しますが、マスクをして表情が分かりづらい中で過ごした時間が多い昨今、気持ちを伝える「言葉」の重要性はさらに増しています。

全世界的にもなかなか不安定な状況が続く中で、大人だけでなく子どもの世界でも言葉が荒れている様子が、残念ながらみられます。日吉台小学校では言葉を大切にした「国語」の授業研究を進めており、自分の思いや願いを言葉にのせて伝える場面を増やしています。ぜひご家庭でも、お子さんが普段使っている言葉（特にしゃべり言葉）を知っていただくとともに、クリスマスや年末年始などの機会を生かして、感謝の気持ちを言葉でしっかりと伝える場面を意図的に増やし、穏やかで優しい語彙を大切にしていただけたらと思います。